

令和7年度 世田谷美術館友の会総会

5月11日(日) 参加者53名 委任状235名 計288名(会員数597名)

総会を終えて

深緑の下、令和7年度世田谷美術館友の会総会は、規約に則り司会者の開会宣言で始まりました。

山崎勉新代表世話人の挨拶。友の会の深い情愛を持ちつつも、更に充実した意気込みが強く心を打ちました。

真剣で和やかな雰囲気の中で橋本善八館長のお言葉は、友の会への愛情あるものでした。美術館も当然デジタル化が普及し生成AIについても今後研究が深められないかということ、また、伝統的とも言える友の会の、世話人は世話をする役割を担う会員同士の共に学び共に美術館を支えようとする象徴的な言葉であり実践団体だという有り難い言葉を親身なものと受け止めました。友の会の代表は会長としないで世話人代表とされていることも社会貢献団体として意味あるものと述べられました。



美術館幹部職員の紹介の後、議事に入りました。世話人会で提案した議事について慎重に審議の上、満場一致で賛同いただきました。

総会終了後に展示中の「横尾忠則 連画の河」展について塚田美紀学芸員に解説をいただき、さらに知見を深める糧となりそれぞれ展示室へ向かいました。(友の会総務部)

世田谷美術館・友の会共催 解説・鑑賞会 ミュージアム コレクション III 「1980年代のイギリス美術—展覧会の記憶とともに」 講師：塩田純一(多摩美術大学客員教授/美術評論家) 司会：樋口茉莉奈 学芸員

1月29日(水) 参加者94名

「1980年代イギリス美術コレクションはどのように形成されたのか」に関しての解説鑑賞文

鈴木みどり

世田谷美術館のコレクションである1980年代のイギリス美術の絵画や彫刻を主に展示され、世田谷美術館での企画展も振り返られる展覧会です。出発点は「芸術と素朴」展だそうですが、St. Ivesでのアーティストコロニーの話や70歳頃で絵画を始めて、ベン・ニコルソンに見出されたアルフレッド・ウォリスやウィンストン・チャーチル元英首相の絵画なども見られます。

80年代のイギリス美術は、ポストモダニズム以降の新たな息吹きであるニュー・ブリティッシュ・スカルプチュア/ニュー・ペインティングという、従来の美術概念の枠から出て、今までにない作品を独自の表現方法や素材で形成するアーティストが台頭し、美術はもう死んだといわれた時代に、密やかな期待が高まります。館内にはアンディ・ゴールズワージーやデイヴィッド・ナッシュなどの自然派の作家の作品もあり、屋外には、アンソニー・カロやリチャード・ロングなどの作品も常設されていて、個人的には、イギリス留学で見慣れた気分だったイギリス美術に、解説後の見直しは、自分なりに表現や気づきの再考察ができたように思いました。



世田谷美術館・友の会共催 解説・鑑賞会 世田谷美術館コレクション選 「緑の惑星 セタビの森の植物たち」 解説：東谷千恵子 学芸員

3月1日(土) 参加者56名

センス・オブ・ワンダー

竹田泰教

解説の最後に「大人向けの話」として紹介された、ある科学研究所のレポートによると、生物の総量よりも人類が生産した人工物の総量のほうが近年多くなってしまったという。美しい「緑の惑星」をどのように次の世代に残していくか—植物に関する美術館のコレクションと区内の小学生が制作した作品を通して、本展は私たちに問いかける。

生命力を宿した迫力のある作品群、通常とは逆の展示順路、「楽園」というテーマ、参加型コーナーなど、この展覧会は驚きに満ちている。自然とは、美しく、そして驚異的なものだ。レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』が、自然にふれるときの人間の心の動きを言葉で描いたように、これらの絵画や彫刻、子どもたちの作品も、同じような感動を与えてくれる。作品を観たあとに現れる窓外の木々はあまりに美しい。植物のおかげで人間はこの惑星に生きることができる。身近な緑にふれるときにそのことを思い出したい。



油彩講座 講師：早矢仕素子

1月17日(金)～3月7日(金) 全8回 参加者21名

油彩をかじってみた

向井良友

世田谷美術館美術大学で習ったチャレンジ精神で初めての油彩! 持ち物のご案内が届くが、油彩セットって何? 困ったときの世界堂。店員さんにご案内を見せて、言われるがままにすべてをお買い上げ。油彩セットは立派な木の箱に入っていて、持っているだけで画家気分。ドキドキワクワクで講座に参加するが、美術大学の同期の皆さんが心強い。まずはクロッキーから始めるが、気づいたら周りの方はすでに油彩を開始。同期メンバーはみんな完全な出遅れ。油彩っていきなり描き始めるんだ。



白いキャンパスに初めて色を載せるのはドキドキ! なんだか怖い。遠慮がちにちょこちょこ絵の具を塗るも、先生から油彩はいくらでも修正できるから怖がらないでと励ましの声。だったらと大胆にべたべた。なんだか楽しい。先生の神の手が入ると、ちょこっと描いただけなのにいきなり素敵! 油彩の奥深さを垣間見る。

同じモチーフなのに様々な色や形の作品が完成。自由に描けるのって本当に楽しい。これからも油彩をかじり続けていこう。

美術講座

「芸術は爆発だ！岡本太郎」

講師：土方明司(川崎市岡本太郎美術館館長、武蔵野美術大学客員教授)

3月20日(木) 参加者93名

「芸術は爆発だ！」に込められた思い

岡本太郎の有名な言葉「芸術は爆発だ！」にはどんな意味があるのか。岡本太郎の生涯や作品を紐解きながら、その意味するところを解き明かしていただきました。

パリにいた10年間で、ピカソに刺激を受けますが、ある時から何のために絵を描くのかの疑問が湧き、絵が描けなくなってしまったそうです。宗教学、心理学、民族学を学び人の成り立ちを深く考えるようになります。

そして、縄文土器や祭りの中に、日本人が本来持っている底力を発見します。それは学者としてではなくアーティストとしての直感をもたらしたものです。芸術は狭いジャンルにとどめると窒息してしまいます。芸術は

特権的な人のものではないと考え、自分自身もテレビやCMに出演しピエロのようになり、一般の人を美術と結びつけようとしています。

「芸術は爆発だ！」とは、芸術は人間の精神や魂を復活させるものであり、死と再生を促すものだという意味であるとして説明いただき、この言葉の意味深さをあらためて知ることとなりました。

川崎市岡本太郎美術館には、年齢も関係なく様々な方々が訪れるそうです。これこそ、岡本太郎が目指していた芸術と触れる場だと思います。この講座をお聞きしてまた美術館に足を運びたくになりました。(友の会広報部)



第38回 アート散歩

川崎市岡本太郎美術館

3月22日(土) 参加者19名

アート散歩に参加して

吉川節子

3月22日、川崎市岡本太郎美術館に行った。生田緑地西口を出発。見晴らし台から富士山が見え、さらに降りると《母の塔》と美術館が眼下に現われた。

入館後「館内を自由に鑑賞してください。また緑地公園も楽しんで」とここで解散。学芸員の片岡さん案内のもと、最初に通る「赤い部屋」は太郎の赤、胎内のイメージ。色彩鮮やかな独特の作品では、原点は10年間すごしたフランス時代にあるという。民族学や抽象美術を学びピカソと出会った。《若い太陽の塔》《若い時計台》の前では「芸術は暮らしの中でこそ生きる」との主義で、全国に多くの作品が設置されているという。聞きながら大阪の《太陽の塔》など、あれこれが



思い浮かんだ。日常風景の中に岡本太郎が存在している、と今回改めて認識できた。

開催中の「第28回岡本太郎現代芸術賞展」も見応え十分。帰途は日本民家園を経て東口へ。有意義で楽しい岡本太郎再発見!! のアート散歩でした。

準備して下さった皆様ありがとうございました。



分館ギャラリートーク 宮本三郎記念美術館

「Journeys — 宮本三郎 旅する絵画」

解説：加藤絢 学芸員

2月15日(土) 参加者14名

宮本三郎と旅をする

宮本三郎という人物画を思い浮かべるが、今回展示されていたのは宮本三郎が訪れた場所を描いた風景画が中心である。加藤絢学芸員からその場所とその当時の様子をお聞きしながら、宮本三郎と共に旅するような気分分で絵を追っていった。

全部で7つの章で展示された旅。まだ海外に行ったことのない時代から、初めてのヨーロッパ、従軍画家としてのアジア、疎開した小松と金沢、戦後再びのヨーロッパ、見つめ直す日本的なもの、そして日本の自然と都会の夜景。その時々で感じた様を描き出した風景は、その当時の宮本三郎の思いが伝わってくる様である。日本を描くにしても海外を旅した後に見つめる風景はまた違ったものに見えてくるようだ。風景画の数々は、人物画と違って楽しんで描いているようで、解放された感

じがする。

まさに宮本三郎の人生の旅を見つめるような展示であり、解説であったと思う。

(友の会広報部)

*2025年の友の会会員証のデザインは、宮本三郎の《黒鳥》です。宮本三郎記念美術館で9月7日まで展示の予定です。ぜひ、訪れて実際の絵をご覧ください。



私のお薦めのアート本

『へんな日本美術史』山口晃著 祥伝社 2012

へんな美術史のすごい面白さ

山田行孝

へんなタイトルです。しかしタイトルに反し著者は名作や有名作家を独特の心眼で円月殺法よろしく一刀両断。切れ味もよく中々の無頼の徒です。山口さんは芸大の油画卒で、日本画風だけど自由な感性と超絶技巧で描く超ユニークな人気作家です。氏の広い知識と鋭い観察力で、その作品の裏の心理も分析し、鳥獣戯画から明治の日本画まで、へんな先人の心模様の記述のてんこ盛りが小気味よいです。

凡人には、作品の背景の説明がないと作品をしれっとわかったふりをして見過ごしてしまいがちです

が、山口画伯は流石で作家の心情を見抜き代弁してしまいます。伝源頼朝、雪舟、洛中洛外図分析、晁斎等は特に感心しました。

日本の美術史は、へんな作家達の賜物かもしれない、それ故今流行りのコミックや、芸術作品が面白いのかもしれない。へんな日本作家の中にはへんな山口さんもいらつやるというオチも見え隠れします。

この本は講演会がベースですが、世田美でも講演いただけないかなあの読後感でした。



世田谷美術館・友の会共催 世田谷美術館さくら祭

3月29日(土)・30日(日)

砧公園の誇る桜も七分咲きとなり、一日目はあいにくの雨でしたが二日目は回復して活気のある桜祭りとなりました。

お祭りでは恒例の世田谷美術館美術大学の卒業生や友の会会員によるフリーマーケット、川場村からの物産展、美術館レストラン「ル・ジャルダン」の出店などがあり賑やかになりました。

美術館のメインイベントは現在開催中の展覧会「緑の惑星」に関連した「春の踊り! みんな輪になって『葉っぱのダンス—光合成』を踊ろう!」。葉画家の群馬直美さんの振り付けのもと、一日目は展覧会会場で二日目はクヌギ広場の大きなクヌギの木の周りでたくさんの方が元気に踊り楽しみました。

友の会の参加したフリーマーケットでは、多くの品物をご寄付して下さったおかげで49,130円の収益があり、友の会の基金に組入れることができました。心より感謝申し上げます。(友の会広報部)



思い出の美術館

ビルバオ・グッゲンハイム美術館

山下秀俊

スペイン北部バスク地方のビルバオ。昔ながらの建物が佇む静かな街に、目を見張るような現代建築があります。それが、現代美術を集めたグッゲンハイム美術館です。六本木ヒルズでも目にする蜘蛛をかたどった彫刻や、中谷芙二子による「霧の彫刻」等、日本人にも馴染みのある作品もありました。

中でも一番印象に残ったのは、建物の外にある生花で作られた巨大な犬の像でした。巨大ですが可愛らしくとても愛おしい、ジェフ・クーンズの《パピー》という作品です。斬新な現代建築と可愛い犬の対比がなんとも言えなくて、いつまでも見ていたくなりました。どうやってこの生花を維持しているのだろうと不思議でした。

十数年前に訪れた時、日本人もほとんどいなくて、作品に見とれていると「日本人ですか?」と声をかけてきた少女がいたのです。一言二言話すとその少女は消えていました。まるで幻だったかのように。そんな不思議で甘美な思い出を残す美術館です。



これからの事業について

- ◎ 会員作品展 11月5日(水)~9日(日)
 - ◎ 木口木版画講座 9月3日(水)~10月8日(水) 全6回
 - ◎ 銅版画講座 9月5日(金)~10月10日(金) 全6回
 - ◎ デッサン講座 1月14日(水)~2月25日(水) 全4回
 - ◎ 油彩講座 1月16日(金)~3月6日(金) 全8回
 - ◎ 美術講座 予定
 - ◎ 美術館めぐり 予定
 - ◎ アート散歩 予定
 - ◎ 解説・鑑賞会 企画展・ミュージアム コレクション展ごとに予定
- * 2025年度の各事業につきましては実施の詳細が決まり次第、会員の皆様にチラシや友の会ホームページ等でお知らせいたします。

世田谷美術館友の会に入会しませんか!

世田谷美術館エントランスにはラテン語で「藝術と自然は密かに協力して人間を健全にする」と彫り込まれています。館のサポーター・ファンクラブである友の会に入会し、生活に彩りを加えてみませんか。特典や入会手続きは下記へ。

お問い合わせは友の会事務局へ

入会案内(リーフレット)や下記ホームページもご覧ください。

Tel. 03-3416-0607
<https://setabi-tomonokai.jp/>

